

歴史に翻弄されながら、時代とともに進化した両国

江戸市中の6割を

焼き尽くした「明暦の大火」

明暦3年1月18日（1657年3月2日）、約80日にわたり雨が降っていない江戸は、からからに乾き切っていました。しかも、この日は未明から強風が吹き荒れ、砂塵を巻き上げていたのです。

最初に火の手が上がったのは、未の刻（午後2時頃）のこと。火元は文京区の本妙寺。火は強風にあおられ、本郷、湯島、駿河台へと延焼し、湯島天神、神田明神、東本願寺も焼け落ちたのです。さらに、猛火は神田、日本橋へ南下し、佃島、石川島を焼き払いました。吉原もあつという間に全焼、隅田川を越えた火は向島八幡宮も焼失させたのです。鎮火したのは、夜もふけてからのことでした。

江戸城の天守閣、本丸、二の丸も焼失

ところが、翌19日の巳の刻（午前10時頃）に、小石川から再び火が出ます。江戸城の天守閣、本丸、二の丸が炎上し、日本橋、京橋などの橋も焼失しました。新橋木挽町（現在の銀座）一帯を焼き払い、ようやく鎮火。安心もつかの間、3度目の火の手が、19日の申の刻（午後4時頃）に麹町から上がりました。江戸城の堀に沿って南下した猛火は、日比谷から芝浦にまで到達し、翌20日の朝になり、やっと鎮火したのです。諸説ありますが、明暦の大火では江戸市中の6割が焼失し、10万人以上の尊い命が失われたといわれます。江戸幕府草創以来の大災害ですが、これが大規模な江戸の都市改造につながっていったのです。

大火の無縁仏を弔うために 創設された「回向院」

歴史を両国橋の完成よりも数年ほど巻き戻しましょう。明暦の大火が鎮火した後のことです。犠牲者の多くは身元がわかりませんでした。これらの無縁者の埋葬の場を設けることが急務となったのです。將軍家綱は、隅田川の東岸に、無縁仏を手厚く葬るための土地を与え、大法要を執り行ったのです。このときにお念仏を行じる御堂が建てられたのが、現在の回向院のはじまりといわれています。

その後も、天明の浅間山の大噴火、安政の大地震など、江戸時代には大きな災害が何度も起きました。その都度、回向院は宗旨にかぎらず無縁仏を受け入れ、一心に供養を行ってきたのです。

回向院は江戸庶民のワンダーランドでした

無縁寺としてはじまった回向院ですが、一方では境内の堂宇に安置された観世音菩薩や弁財天などが、江戸庶民に尊崇され、さまざまな巡拝の札所としても知られるようになりました。

また、回向院は信州善光寺や嵯峨清涼寺をはじめとする多くの有名寺院の秘仏が開帳される出開帳寺でもありました。江戸時代だけでも167回以上は開催されたといわれ、多くの参拝者が訪れたのです。そして、天明元年（1781年）に、初めて回向院の境内で勸進相撲が行われました。天保4年（1833年）からは、春夏開催の江戸相撲の常設場所となり、神社参拝と相撲見物の両方で大いににぎわったのです。

かつては「両国花火大会」と呼ばれた、日本で最も長い歴史を持つ「隅田川花火大会」



「両国花火大会」は江戸の夏を彩る一大イベントでした

回向院の山門、江戸時代は隅田川に面したように表門がありました



境内にある「力塚」、1936年に歴代相撲年寄の慰霊のために建立

再建されなかった江戸城の天守閣の台座部分、中央の黒い部分は明暦の大火の焼け跡



明暦の大火を描いた田代幸春の「江戸火事図巻」（江戸東京博物館所蔵）



二つの国を結んだ「両国橋」（分間江戸大絵図完 安政6年）



江戸時代よりも50mほど上流に竣工された現在の両国橋（1932年竣工）

武蔵国と下総国

二つの国を結んだ「両国橋」

江戸幕府は江戸城を防衛する狙いから、隅田川へかかる橋は千住大橋のみとし、架橋を厳しく規制してきました。しかし、明暦の大火ではこれが災いし、逃げ場を失った多くの人々が犠牲になったのです。

4代將軍、徳川家綱はこの反省から、隅田川への架橋を決断。これにより寛文元年（1661年）に、江戸で最初の大掛かりな橋、「両国橋」が完成したのです。それは明暦の大火から4年後のことでした。橋の長さは94間（約200m）、幅は4間（約8m）、当初は大橋と名付けられていましたが、隅田川を境界とした武蔵国と下総国の二つ国を結んだ橋は、次第に両国橋と呼ばれるようになったのです。

両国橋の完成で変化していった隅田川界隈

両国橋の完成により舟でしか行き来ができなかった二つの国が、歩いて行けるようになりました。これは人々に大きな喜びを与え、隅田川をはさんだ地域を大きく変えていくきっかけになったのです。両国橋の西側には火徐地（ひよけち）として、両国小路が設けられ、東日本橋界隈は江戸を代表するにぎわいの場となりました。数多くの見世物小屋、芝居小屋、茶屋などが軒を並べていたそうです。現在、巴沔が店舗を構えている場所は、両国橋の東側です。こちらも時を同じくして、にぎわいを見せていきます。その牽引役となったのが、巴沔から歩いて数分のところにある「回向院」です。

江戸の華といえば 「両国の花火大会」です

相撲と並んで両国を代表するものといえば、7月の最終土曜日に開催される「隅田川花火大会」です。この花火大会は、かつては「両国の花火大会」と呼ばれ、日本で最も長い歴史を持っています。

そのはじまりは、第8代將軍、吉宗の時代にさかのぼります。享保17年（1732年）の大飢饉と疫病の流行で亡くなった人々の慰霊と悪病退散を祈り、吉宗は隅田川で水神祭と施餓鬼を行いました。

この時に、両国橋周辺の料理屋が幕府の許可を得て、花火を打ち上げたのが、現在の花火大会のはじまりといわれています。同じ飲食業として、当時の料理屋の心意気を感じざるを得ません。

江戸っ子の夏の夕涼みとして人気を博しました

この時、花火を担当したのは両国の「鍵屋」の6代目、篠原弥平衛でした。その後、鍵屋から暖簾分けをした「玉屋」が加わりました。「たまやう、かぎやう」という掛け声はここから生まれたのです。

また、花火を楽しむ屋形船が隅田川に浮かぶ様は、数多くの絵師の絵心をかき立て、浮世絵の名作を世に送り出しました。両国の花火の人気は回数を重ねる度に高まってきました。

多くの江戸っ子が、掛け声を上げながら、夜空に打ち上げられる色鮮やかな花火を楽しんだ両国の花火大会。それは、人々を惹きつけてやまない江戸の夏の風物詩だったのです。

両国は江戸庶民が、胸躍らせて楽しんだ場所でした



お陰さまで創業 40年

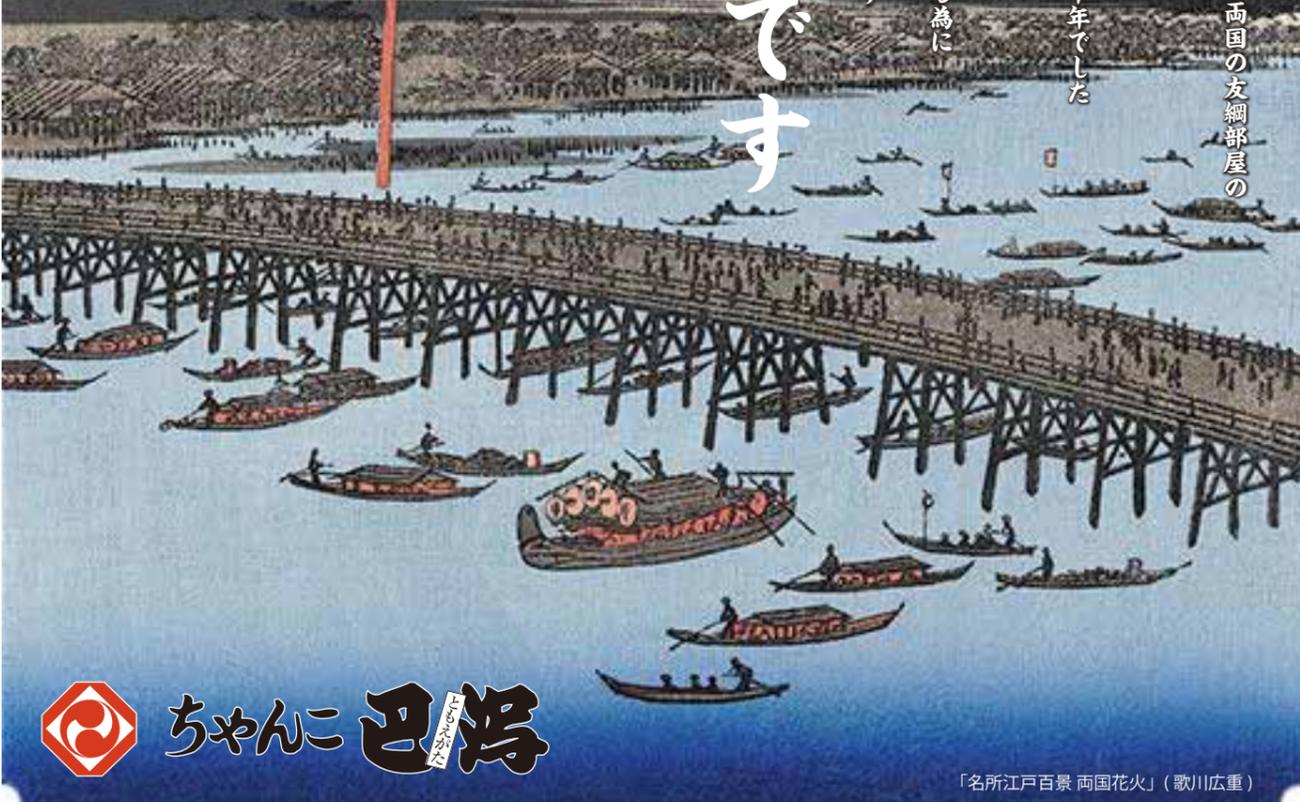
巴 鴻 新聞

創業40年 特集号 第1弾



両国が大好きです

いまから四十年前の昭和五十一年（一九七六年）、両国の友綱部屋の跡地に、一軒のちゃんこ料理店が開業しました。それが現在のちゃんこ巴 鴻はじまりです。振り返れば、たくさんの喜びと苦難に満ちた四十年でした。いつも温かく見守ってくれたのは、創業の地である両国の人々の義理人情です。これまでも、これからも両国とともに歩み続ける為に、今回の巴 鴻新聞は創業四十年特集号として、江戸時代を中心に、両国の歴史をたどってまいります。



「名所江戸百景 両国花火」(歌川広重)



相撲とともに歩んできた両国を、これからも大事にしたい

回向院からはじまった両国の相撲、それは庶民の気持ちを湧き立てる存在でした。春夏に開催される勸進相撲では、両国橋際に太鼓の櫓が架設され、本場所の開始を知らせる櫓太鼓が打ち鳴らされました。

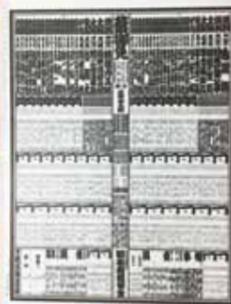
一番太鼓は場所の開始を、二番太鼓は閑取の入場を告げました。早朝に打つ太鼓の音は、隅田川を渡り、遠くは品川辺りまで聞こえたといえます。さぞかし、人々の気持ちをかきたてたことでしょう。

興行中の境内にはよしず張りの仮小屋が建てられます。その大きさは2階席、3階席まで設けられた巨大なもので、ここに大勢の観客が訪れ、ひいきの力士たちの取り組みを楽しんだのです。

番付表の「蒙御免」の意味とは？

江戸後期になりますと、相撲の歴史で名高い、谷風、小野川、雷電の三大強豪力士が現れます。將軍上覧相撲も行われ、相撲風景や力士のにしき絵もつくられ、相撲の人気はますます高まっていきました。相撲の人気の高まりと同時に、勝ち負けをめぐるけんかや争い事も頻繁に起こるようになりました。そのため、幕府はたびたび禁止令を出すほどでした。

現在でも番付表の中央の上部に「蒙御免（ごめんこむる）」と書かれています。これは幕府公認の相撲興行という意味を現しています。



一雄齋国輝「勸進大相撲取組之図」(回向院所蔵)

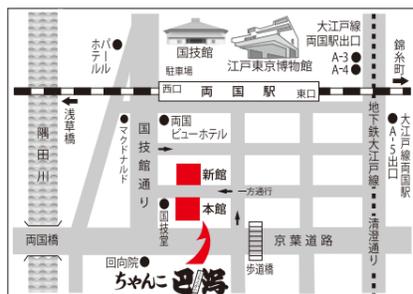
相撲は歌舞伎と並ぶ江戸庶民の楽しみでした

回向院での勸進相撲は、明治43年（1910年）、両国国技館が完成するまでの76年間続きました。回向院の近隣には、人形浄瑠璃や歌舞伎小屋や茶店などが軒を連ね、上野や浅草に匹敵するにぎわいを誇ったのです。

相撲が歌舞伎と並ぶ庶民の娯楽としての大きな地位を占めるに連れ、両国はさまざまな文化の花開く場所となりました。

力士の食事であるちゃんこ料理の伝統もそのひとつといえるかもしれません。

その両国でいまから40年前に誕生したちゃんこ巴鴻。両国に守られ、両国とともに歩み、今日に至ったことに感謝し、これからも、ちゃんこを通じて、和の食文化を伝えてまいります。



ちゃんこ巴鴻 検索



ご予約 03-3632-5600
お問合せ FAX 03-3635-3056
〒130-0026 東京都墨田区両国 2-17-6

全300席 本館130席 新館170席
営業時間
平日 11時半～14時 17時～22時
土・日・祝日 11時半～14時 16時半～22時
※6月～8月は月曜定休